

情報資源管理総論

2012.8.19

松山 巖（玉川大学）

（はじめに）

名称は総論だが、情報資源管理に関する内容を網羅的に概観するには時間も少なく、また担当者の力量も及ばないので、焦点を絞って取り上げたい。それを補うものとして、文献を若干紹介しておく。

- 『図書館・図書館学の発展-21 世紀初頭の図書館』（図書館界, 61(5), 2010）
過去 10 年間の図書館界, および図書館学の研究に関するレビュー。動向の概説と, 多数の文献の紹介からなる。
同一のタイトルで単行本にもなっている (ISBN978-4-930992-21-5, 定価 4,000 円+税別, 日本図書館研究会発行, 日本図書館協会発売)。
- 特集『ウェブ検索時代の目録』（図書館雑誌, 103(6), 2009）
- 特集『分類新時代』（現代の図書館, 48(4), 2010）

（前置き）

司書科目の変遷

「図書目録法」「図書分類法」
1968 「資料目録法」「資料分類法」
1996 「資料組織概説」「資料組織演習」 ←「組織化する」という視点の導入
2009 「情報資源組織論」「情報資源組織演習」 ←モノに限らない「情報資源」

図書館の定義

「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」（図書館法第 2 条）

「図書とは人類の記憶を保存する一種の社会的メカニズムであり、図書館はこれを生きている個人の意識に還元するこれまた社会的な一種の装置である」（ピアス・バトラー『図書館学序説』藤野幸雄訳, 日本図書館協会, 1978）

司書とは

図書選択者に求められる条件：本を知り，利用者を知り，図書館の使命を知っていること（前川恒雄『われらの図書館』を乱暴に要約）

…選択者に限らず，（professional としての）司書そのものに求められるのでは。

目録を取り巻く世界の変化

コンピュータの導入

（単館レベルでの「機械化」）

書誌ユーティリティ

（図書館業界で閉じてはいたが，ネットワーク化）

インターネットの登場

（図書館業界内ではネットワーク化の延長線上？）

書誌データの流通が容易に。

一般利用者間でのインターネットの普及

インターネットで出来ることの爆発的な進化・拡大

利用者の要求水準がレベルアップ

なかなか変化しない OPAC

目録の危機

インターネット（上のいろいろな機能）さえあれば OPAC は要らない？

ついでに図書館も要らない？

（余談）よく知らない人ほど「これからは〇〇の時代だ，××は古い」と断言したがる傾向があるような気がする。

二分法は便利ではあるが怖い面も

目録は何ができる（べき）か

パリ原則（1961）

2. *Functions of the Catalogue*

The catalogue should be an efficient instrument for ascertaining

2.1 whether the library contains a particular book specified by

(a) its author and title, *or*

(b) if the author is not named in the book, its title alone, *or*

(c) if author and title are inappropriate or insufficient for identification, a suitable substitute for the title; and

2.2 (a) which works by a particular author and

(b) which editions of a particular work are in the library.

(注) 主題からのアクセスについて触れられていないのは、もともと「著者記入・署名記入はどのような機能を持つべきか」という前提だからで、主題からの検索はするなどしているわけではない。

国際目録原則覚書 (2009)

4. 目録の目的および機能

目録は、利用者に次のことを可能にする、有効かつ効率的な道具であるものとする。

4.1. その資料の属性または関連を探索に用いた結果として、あるコレクションの中で書誌的資源を**発見**すること。

4.1.1. これにより、単一の資料を**発見**すること

4.1.2. これにより、次に相当する一群の資料を**発見**すること

同一の著作に属するすべての資料

同一の表現形を具体化するすべての資料

同一の体現形を例示するすべての資料

特定の個人、家族、または団体に関係するすべての資料

特定の主題に関するすべての資料

探索結果の二次的な限定のために通常用いられるその他の判断基準（言語、出版地、出版年、内容種別、キャリア種別、その他）によって特定されるすべての資料

4.2. ある書誌的資源または行為主体を**識別**すること（すなわち、記述された実体が求める実体と一致することを確認すること、または類似の特性をもつ 2 以上の実体を区別すること）。

4.3. 利用者のニーズに適合する書誌的資源を**選択**すること（すなわち、媒体、内容、キャリア等に照らして利用者の要求を満たす資料を選ぶこと、または利用者のニーズに適合しない資料を排除すること）。

4.4. 記述された個別資料を**取得**するか、またはそれに対するアクセスを**確保**すること（すなわち、利用者が購入や貸借等によって個別資料を取得すること、または遠隔情報源にオンライン接続し、個別資料に電子的にアクセスすることができるよう情報を提供すること）、または典拠データもしくは書誌データにアクセスし、それらを取得し、もしくは入手すること。

4.5. 目録の中を、そして外へ**誘導**すること（すなわち、書誌データおよび典拠データの論理的な排列、ならびに、著作、表現形、体現形、個別資料、個人、家族、団

体、概念、物、出来事および場所の相互の関連の表示を含めて、動き回るための明確な道筋が示されていることによる)。

(このへんからだんだんと本題)

OPAC2.0, 次世代 OPAC

2006 年ごろから

従来の OPAC にさまざまな機能を付加した、より利用者親和性の高い OPAC

厳密な定義があるわけではないが、おおむね次のような機能が考えられる。(一昨年の渡邊隆弘先生のレジュメに加筆)

- 入力支援
 - 簡略な検索画面： Google ライクのシンプルさ
 - キーワード入力補助： スペルチェック、自動修正、先読み候補表示など
 - 関連キーワードの視覚化： タグクラウドなど
- 情報表示の充実
 - レlevance ランキング： 入力語に関連度の高いものから表示
 - ソート機能
 - 1次情報へのリンク
 - 書誌情報の拡張（増強）： 書影、目次、内容紹介など
 - FRBR 化表示： 様々な「版」をまとめて、「著作」単位に構造化した表示
- 絞り込み
 - ファセット型ブラウジング： 絞り込み用のメニューを様々な「視点」から表示
- 利用者参加
 - タグ、コメント、レビューなど
- 個別の利用者に合わせた情報提供（SDIの拡張ともいえる）
 - レコメンデーション
- 外部 DB との統合検索： 各種電子情報資源とシームレスに

OPAC では（特に我が国では）立ち後れが目立ったが、2010 年以降徐々に実践例も。

慶応大学，筑波大学，国立国会図書館サーチ…

何でも 2.0 になればいいのか？

Google-like な検索窓

「とりあえず何か入れれば何か出てくる」のノリで探す分にはいいが、「何を入れればいいのか」も分からない状態だと放り出された感がある

「図書は図書、雑誌は雑誌」と分断されているのが従来型の欠点とされていた
→国会では、デフォルトでは視聴覚資料から雑誌記事索引まで検索される
利用者の情報探索行動に照らして、どうなのでしょう
多ければいいってわけでもない

もく - ろく【目録】

- ①書物の中の内容の見出しを順序立ててならべたもの。目次。
- ②所蔵・出品されているものの品目を整理してならべたもの。「蔵書一」「在庫一」「財産一」
- ③進物の品々の名を記したもの。
- ④転じて、実物の代りに仮にその品目の名だけを記して贈るもの。【用例略】
- ⑤進物として贈る金の包み。
- ⑥武術・芸道を門人に伝授し終わった時、その武術・芸道の名目と伝授し終わった由とを記して授与する文書。（『広辞苑』第6版）

従来の目録：「蔵書目録」という呼び方が示すように、在庫管理からスタート
目録は「実物の身代わり」

初めは単なる一覧表

→カードとしてばらしても、あくまでも実物と1対1に対応する身代わり＝基本記入

→どうせなら検索もできたほうが便利→副出記入を作る

今日の利用者には、在庫の有無を調べるという意識よりも、自分の求める情報（源）にたどりつきたい意識の方が強い

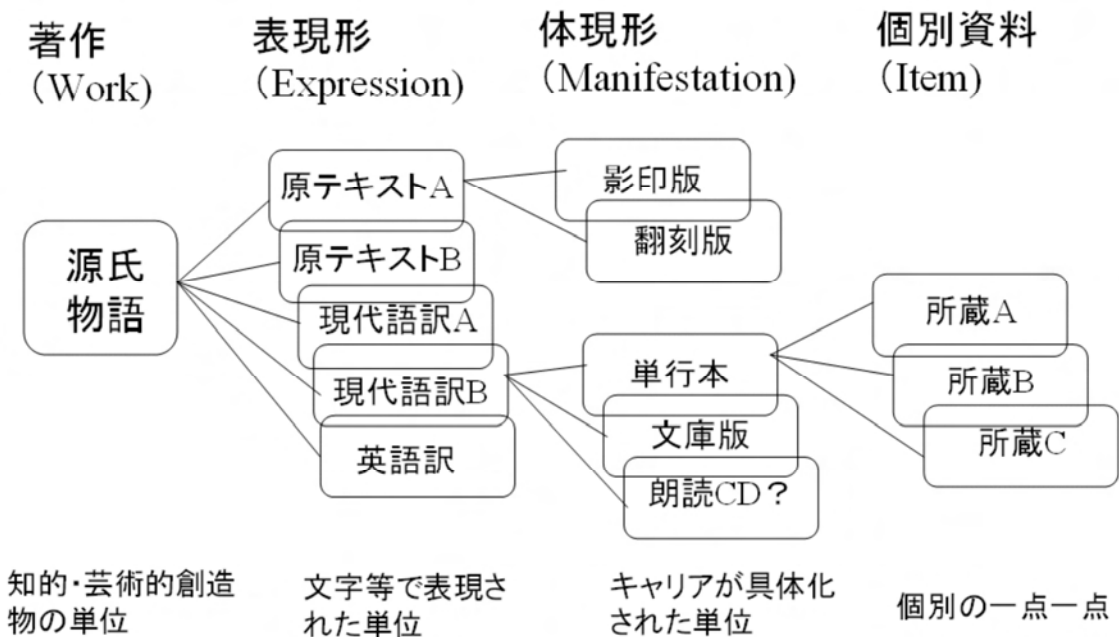
パソコン通信からインターネットに組織の壁を越えた利用者が、図書館の壁を越えたいと思うのも自然なことであろう。

FRBR（書誌レコードの機能要件）（この項渡邊先生レジュメに加筆）

- 目録規則そのものではなく、今後の目録規則の基礎になる枠組み
- Functional Requirement for Bibliographic Record (IFLA 1997)
「書誌的世界」の「概念モデル」・・・「実体関連モデル（E-Rモデル）」
「実体」「属性」「関連」で情報を整理
- 資料を4段階の枠組み（抽象→具体）で把握：グループ1の「実体」
 - 「著作（Work）」…知的・芸術的創造物の単位
 - 「表現形（Expression）」…文字、音声等で表現された単位
 - 「体現形（Manifestation）」…キャリアが確定し、具体物となった単位
 - 「個別資料（Item）」…個別の一点一点

- これまでの「著作」と「版」の考え方を発展
「コンテンツ」と「キャリア」（内容的側面と物理的側面）の問題
→ 「表現形」を新たに設定して整理
- グループ 2 の実体…成果物を作る主体を表す。
「個人(person)」「団体(corporate body)」
- グループ 3 の実体…著作の主題を表す。
「概念(concept)」「物(object)」「出来事(event)」「場所(place)」
- 各実体ごとに「属性(Attribute)」を設定
例 著作→「著作タイトル」「形式」「成立日付」「想定利用者」 etc.
体現形→「体現形タイトル」「責任表示」「版・刷表示」「出版地」「出版者」「数量」 etc.
- グループ 2, 3 は従来の著者名典拠や主題情報にあたる → 典拠情報の重要性
- 実体同士の間に「関連(relation)」を設定

英米目録規則(AACR2)の改訂版は、当初は AACR3 と呼ばれていたが、FRBR を全面的に取り入れて大幅な改訂を行い、名称も RDA (Resource Description and Access)となった。2010.6 刊行、当初はオンライン版のみ→のちに冊子体（加除式）も刊行。



今後の気になる動向

NCR

最新版は 1987 年版改訂 3 版だが、次は改訂 4 版ではなく 201x 年版（仮称）。FRBR をとり入れるのは間違いはないだろうが、単純な RDA の訳というわけにもいかない。

NDL

『国立国会図書館の書誌データの作成・提供の方針』

「2008 年度から 5 年を目途として実現を進めていきます。(2008 年 3 月策定)」

方針は、次の 6 項目とする。

方針 1：書誌データの開放性を高め、ウェブ上での提供を前提として、ユーザが多様な方法で容易に入手、活用できるようにする。

→インターネット上の情報提供サービスから、書誌データ自体のダウンロード、取得ができるようにし、ユーザが更に自由に、多様な方法で書誌データを使い得るようにする。

方針 2：情報検索システムを一層使いやすくする。

→方針 1 と合わせて、NDL の所蔵資料へのアクセスの基本となる NDL-OPAC 又はその後継の検索システムについて、操作性の向上、一次情報へのリンク、外部システムからの連携の容易さ、検索可能な書誌データの充実等を実現していく。また、情報検索システム間のアクセスマートを整備する。

方針 3：電子情報資源も含めて、多様な対象をシームレスにアクセス可能にする。

→NDL が所蔵する各種資料及び情報資源について確実かつ多様なアクセスを可能にするための書誌データの整備を進める。また、所蔵しない資料及び情報資源についても、外部との連携、新しい技術の採用等によって書誌データ整備の対象としていく。

方針 4：書誌データの有効性を高める。

→メタデータ、目録規則等の動向に対応しながら、書誌データの構造、標準、品質、内容等の見直しを図り、方針 1 から 3 に沿った書誌データを目指す。

方針 5：書誌データ作成の効率化、迅速化を進める。

→収集書誌業務の再編、外部データの活用等によって、書誌データの作成・提供の効率化、迅速化を進める。方針 4 に留意しつつ、対象とする資料、用途によって書誌データの詳細さのレベルを切り分け、場合によっては簡略化する。

方針 6 : 外部資源、知識、技術を活用する

→効率化及び書誌データ拡充のために外部データ等を活用するとともに、各種データを用いた研究等にデータを提供する等の方法で積極的に協力し、その活用を図る。

具体的に、2009年1月からは書誌記述に民間 MARC を利用

国内書誌データの一元化？

「我国を代表する書誌データの一元化」について（JLA 2010. 2. 9）

活字文化議員連盟は1月27日に開催した総会において、「官民の協力のもと、文字・活字文化の記録を保存し、国民がいつの時代にも活用できるよう我国を代表する書誌データの一元化に努める。」との活動計画を確認しました。日本図書館協会は、この提起に賛同するものです。

書誌データとは、今日ではいわゆる MARC を指し、当協会は MARC が誕生した初期の頃から、その標準化を図り、すべての図書館で利用できることや出版流通にも活用できること、などを主張し、MARC に関わる検討の際には協会代表が参画し協力してきました。書籍データセンターの発足、運営にも関わり、また JAPAN/MARC の普及に努めてきました。

質の高い書誌情報にアクセスし、自由に活用できることは出版文化の振興に欠かせません。書誌情報は、版元、取次、書店、図書館など、書籍に関連する様々な場面で利用されています。書誌情報により、読者、国民が求める書籍を確実に提供することを可能にしています。書誌情報は、書籍等の知的資源にとって基本的なインフラであり、したがって公共的かつ標準的であり、無償もしくは低廉な価格で供給されるべきものです。

標準 MARC は世界各国をみても、国の納本図書館がその作成の責務を担っております。日本でも国立国会図書館は、納本制度に基づき我が国で出版される書籍等を網羅的に収集し、もっとも包括的標準的な書誌データとして、全国書誌の役割を果たす JAPAN/MARC を作成しています。書誌データの一元化は JAPAN/MARC によることが合理的です。

この JAPAN/MARC がよりいっそう標準 MARC として機能するためには、その利便性を高めることが求められます。図書館はもちろん、版元、取次、書店等を含め、読者にとって望ましい書誌情報が迅速、効率的に提供されることが必要です。

国民読書年にあたって、JAPAN/MARC による書誌データの一元化を文字・活字文化の振興に資する課題として関係機関、団体が一致して推進されることを望むものです。

「日本全国書誌の在り方に関する検討会議」（NDL 2010.3.3）

確認事項 5 点

1. 2010 年の国民読書年にちなみ、出版文化の基礎となる出版・書誌情報の重要性を認識し、
2. 納本制度に基づく我が国の出版物の網羅的収集と保存を使命とする国立国会図書館の書誌データ整備をさらに充実したものとし、その利用と普及がより促進され、
3. 我が国における出版・書誌情報における基本インフラとして機能するよう、
4. 出版、流通、書店、図書館、書誌データ作成機関等が協力・連携を強化する。
5. その実現に当たっては、関係者による実務協議の場を設置し、より詳細を検討することとする。

いくら原理原則や目録規則や OPAC の機能が新しくなっても、もとになるデータがきちんと作られていなければ画餅に過ぎない。

ところで、「一元化」云々を議論しているとき、視聴覚資料や地図資料などの組織化まで視野に収められているだろうか？ 現実にこれらの書誌情報はどれくらい整備・流通されているだろうか？ 音楽図書館業界では視聴覚資料の分類や目録規則等について古くより研究があるが、地図資料はどうだろうか？

ALAからは、*Cartographic materials : A manual of interpretation for AACR2 2002 revision. – 2nd ed.* という図書（加除式）が刊行されており、今月末には *RDA and cartographic resources* も刊行予定。一方の NCR だが、条文を読む限り、あまり地図資料に通じていない人が（言い方は悪いが）AACR を見ながら適当に書いたのでは？ という疑念が拭いきれない。次の 201x 年版で改善されるといいのだが、目下 FRBR 等への対応でそれどころではなさそう。

分類法

NDC10 版に向けて検討作業がすすめられ、0, 1, 2, 3, 5, 7 の各類について JLA ウェブサイトおよび図書館雑誌上で試案が公開されている。

あまり大きく変わっているようには思えない。

当初は書架分類のため

→書誌分類法としても使用

→「フルテキストや Web ページに対する自動分類のバックボーンとして使われようとしている…（中略）…が、それらの研究や実践の期待に応えられるだけの性能を持っているだろうか」（藤倉恵一『『日本十進分類法』新訂 10 版をめぐって』現代の図書館, 48(4), 2010)

同論文が指摘する問題点

語彙不足

階層構造の不十分さ

論理的飛躍

積み残した課題

補遺の逐次発行

委員会活動の在り方の見直し 討議の時間が短すぎる

NDC マニュアルの整備

「改訂案の策定には NDL や MARC 会社の実績や分類コードを参考資料として使っているが、委員のそれぞれが専門的知識を有しているわけではない」

いっそのこと、各主題分野ごとに、その分野の専門家でかつ分類法についても理解のある人からなる分科会を組織してはどうだろうか。

件名

「実際に BSH を使って件名を付与している組織が、全国にどれだけあるだろうか」(NDL の会議の席上での発言)

BSH と NDLSH の一本化も検討課題に。

BSH もせっかくシソーラス構造を取り入れたのだから、その構造を OPAC にも組み込んだら有用性ももっと認知されるのでは (NDL のように)

キーワード検索って何。

最後に